

「ルックイースト」の射程 —アジア政経学会全国大会分科会報告—

山本 博之

2012年10月14日、関西学院大学の西宮上ヶ原キャンパスでアジア政経学会の2012年度全国大会が開催され、分科会7「マレーシア東方政策の30年—政策に対するレビューと提言」が行われた。これは、JAMSが今年度進めている東方政策(ルックイースト政策)研究プロジェクトの中間報告の1つとして行われたものである。

分科会では、川端隆史会員による趣旨説明に続き、「東方政策が日本とマレーシアの経済関係に与えたインパクト」(穴沢眞)、「日・マレーシア外交関係の30年—東方政策から「すれ違い」へ」(鈴木絢女)、「新経済政策」におけるキャリアパスと東方政策」(篠崎香織)の3つの報告が行われ、筆者によるコメントの後、フロアの参加者を交えた討論が行われた。

ここでは分科会の報告と討論の一部を紹介することで、東方政策を評価する枠組をいくつか提示してみたい。

*

穴沢報告では経済・産業面での人材育成に即して東方政策の意義が検討されたが、これについては本誌の他の記事にゆずり、以下では経済関係以外の領域での東方政策の意義の検討に紙幅を割くことにする。はじめに、実質的に日本とマレーシアの二国間の政策であるにもかかわらず、なぜこの政策が「ルックジャパン」政策ではなく「ルックイースト」政策と呼ばれるのかについて考えておきたい。日本はマレーシアから見て地理的に北側に位置しており、方角を正確に言えば「ルックノース」になるはずである。それにも

かかわらず「ルックイースト」となっているのは、単純な方角ではなく、東アジア的な文化、より具体的には日本や韓国などの東アジア諸国の勤勉さや企業倫理が「イースト」にこめられているためである。その背景には、1980年代初頭にマレーシアが経済発展を遂げようとする上で、あたかも会社を家族であるかのように見る企業倫理が必要だと考えて、それを「東アジア的価値」と呼んでマレーシアの国民(とりわけマレー人)に身に付けさせたいとする考え方があった。ただし、もし「東アジア的価値に学べ」と言ってしまうと、多民族社会であるマレーシア国内の文脈では、マレー人が華人に学ぶという意味で受け止められかねない。少なくとも東方政策が開始された1980年代初頭において、この言い方は、マレー人は先住民かつ多数派で非マレー人は移民系であると考えられる人々には受け入れにくいものだった。そのため、「東アジア的価値」と言いながらも、実際には日本と韓国との間で進めることになったと理解できる。

これに関連して、本誌でも紹介されている今年6月にマレーシアで開催された東方政策30周年に関するシンポジウムで、筆者の印象に強く残った場面がある。今後は東方政策によって日本だけでなく中国にも学んではどうかという意見がマレー人参加者から出され、会場の参加者の多くから賛意が表明された。これは、今日のマレーシアにおいて、華人とマレー人のどちらが優れているのかという議論に悩まされることなくマレー人が中国との関係を考えることができるようになったこ

とを象徴的に示しているものと受け止めた。

他方で、分科会の篠崎報告で指摘されたように、東方政策に対して華人側から不満が出ている状況はとても興味深い。なぜなら、東方政策はもともとマレー人が東アジア的価値を身に着けるものという暗黙の了解のもとに進められてきたのであって、東アジア的価値をすでに身に着けていると自任する華人にとっては無縁のものだったはずだからである。華人が東方政策に参加できないことへの不満を表明するようになったということは、東方政策を通じて日本に学びたい、あるいは日本と関係を結びたいという華人の願望の表われであり、さらに上述のマレー人の発言と重ねてみるならば、日本との関係を結ぶだけでなく、中国を含む東アジア世界に進出する足掛かりを得たいという願望の表われであるとも考えられる。

鈴木報告では、東方政策が始まった1980年代初頭と比べて、日本とマレーシアの政府要人の往来の数が1990年代に入って減少していることが指摘され、その背景としてマレーシアでは中国との関わりが重視されていることが挙げられた。鈴木報告は日本とマレーシアの「すれ違い」に注目していたが、そこで挙げられていた「すれ違い」の多くは、二国間の関係の悪化ということではなく、マレーシアはいろいろな場面で日本にリーダーシップの役割を期待するが、日本が国際事情を考慮してそれに正面から応えないという意味での「すれ違い」であって、依然としてマレーシアから日本への期待は大きいとも理解できる。また、他の報告者からも指摘されたように、政府要人の往来の減少が直ちに二国間関係の停滞を意味するとは限らず、相互の了解や信頼がある程度醸成されたために政府要人の往来を必要

としなくなったとも考えられる。

東方政策のもと日本で学んだマレー人が増えたことは、東アジア諸国と直接交渉する力を持ったマレー人が増えたということであり、マレー人たちが国内の華人を仲介役にしなくても東アジア諸国と直接交渉できるような下地が作られたとも見ることができる。これに関連して篠崎報告が示唆しているのは、華人を含むマレーシア国民全体が東アジア諸国進出の足掛かりを得たいと考えているということである。このように中国に関心が向く状況で、マレーシアでは政府・民間ともに東方政策や日本との関わりに期待が高まっていると考えられる。

*

なぜ「ルックイースト」政策と呼ばれるのかという最初の問いに戻って考えるならば、日本や韓国との関係の先に、東方政策開始時にはそれほどプレゼンスが大きくなかった中国も意識されており、いずれ中国が台頭したときにどのように関わるのかという問題が織り込まれていたと見ることも可能である。また、そのような状況を迎えた際には、マレーシアが中国と直接対峙する状況を緩和するという意味で第三項としての日本が意味を持つという予測と期待も織り込まれていたと見ることもできるかもしれない。鈴木が指摘するように、日本とマレーシアは共通の課題の前に連携を深める機会を目の前にしていると捉えることもできる。このように考えるならば、今日の東アジア情勢のなかで、東方政策はその意義や役割がますます増していると言えるだろう。